

AI教材は「自動運転」になり得るか？：優秀なナビとドライバーとしての指導者の役割

新・個別指導アシスト習志野校 櫛山亮人

自動車の自動運転技術について語られるとき、必ずといっていいほど「事故が起きたら誰が責任を負うのか」という論点が浮上します。これに対して、教育現場で語られるAI教材は、失敗が顕在化しにくいせいか、議論の俎上ではメリットが前面に出がちです。

「弱点を自動分析してくれる」「一人でも学習を進められる」「最短ルートで点数アップ」いずれも魅力的な機能であり、私たち学習塾にとっても心強いツールになり得ます。しかし、日々授業や面談をしていると、「AIだけでは拾い切れていない部分」がどうしても目についてきます。

1問の不正解の背景には、さまざまな要因が潜んでいます。

- ・問題文の読み飛ばしで条件を見落としたのか。
- ・そもそも単元内容を定着させていないのか。
- ・解法は正しいのに途中計算でつまずいたのか。
- ・時間切れで答えを書けなかったのか。

現在多くのAI教材は、こうした要因を区別することなく「誤答」としてデータを蓄積し、類題を提示してくれます。出題のリコメンドとしては優れていますが、「なぜ間違えたのか」という原因に踏み込めていない限り、同じタイプのミスを繰り返すリスクは残ります。

一方、私たち人間の指導者は、答案用紙に残った消しゴムのあと、解答欄の余白、書き込みの癖、解き始めと終盤のスピードの差など、「スコアには現れない答案の痕跡」からミスの正体を推測することができます。

- ・読み飛ばしが多い生徒には、条件に線を引く習慣づけを。
- ・計算ミスが目立つ生徒には、暗算を控えて途中式を書くルールを。
- ・時間配分に課題がある生徒には、大問ごとの目安時間を意識させる練習を。

必要なアプローチは原因によってまったく異なり、「誤答」という結果だけではそこには到達できません。

興味深いのは、保護者面談での肌感覚です。入塾相談の際にこちらが「AI教材や映像教材などのICT教材を活用しています」とお伝えすると、「最新のものを使って安心しました」という方よりも、「映像任せになってしまわないか」「ちゃんと先生が見てくれますか」と確認される方が多い印象です。「人の目で見て、必要なことを言ってほしい」というニーズは、想像以上に根強く感じられます。

そう考えると、「最新のAIを活用しています」とだけ強く打ち出すアピールは、必ずしも保護者の安心感に直結しません。「AIや映像教材をどう人の目と組み合わせているか」まで含めて伝えるこ

とが重要です。

たとえば、当教室では映像教材を学習の中心に据えていますが、「流しっぱなし」にはしていません。毎回の授業で理解度チェックのテストを行い、その結果を講師が目で確認し、理解度に応じて次の単元に進むか復習して再テストを行うか調整しています。こうした運用についてお伝えすると、「人が管理してくれているなら安心しました」「映像だけではないんですね」という言葉をいただくことが多く、「AI や映像=省力化」ではなく「人の指導を支える道具」として位置づけることの重要性を感じます。

AI 教材は、学習ルートを提案してくれる優秀なナビゲーターです。しかし、カーブの多い山道を安全に走るためには、最終的なハンドル操作と微調整はドライバーに委ねられています。受験指導においても同様に、「ルート提案」と「安全運転」の間をつなぐ役割を、私たち現場の指導者が担う必要があります。

行き当たりばったりの学習よりは、AI が示す道筋に乗った方が良い場面もあるでしょう。ただし現時点では、「何を間違えたか」だけでなく「なぜ間違えたか」を読み解き、学習態度や解き方そのものを修正していくプロセスにおいて、塾講師の役割はまだまだ不可欠です。AI と競うのではなく、AI を賢く使いこなしながら、「人が見ている」ことそのものを搖るぎない指導の価値として提示していくことが、これから学習塾に求められます。